

第37回全史料協全国（群馬）大会を終えて

群馬県立文書館 小高 哲茂

全史料協全国（群馬）大会（以下、群馬大会）は、平成23（2011）年10月27・28日に高崎市の総合保健センター・高崎市立中央図書館、高崎シティギャラリーを会場として361名の参加者（大会スタッフも含む）により開催された。本稿では、開催県事務局担当として、大会の準備段階の様子や運営を通して考えたことを記したい。

公文書管理法と東日本大震災

昨年度の大会・研修委員会では、4月1日に公文書管理法が施行されることに合わせて、法の趣旨を踏まえた地方自治体の公文書等の保存管理活用改善に視点を当てた大会を開催することが検討されていた。詳細については、次期委員会の立ち上げ後、検討することとしていた。しかし、東日本大震災が未曾有の被害をもたらし、その中で多くの公文書・歴史資料も水損・流失した。新たな委員会では、この災害の重大さに鑑み、大会テーマを震災特集とする案も出されたが、震災で浮き彫りになったことも含めて、地域社会における公文書の保存管理、アーカイブズの役割・意義などについて考えることが重要であるということ、「地域社会とともに歩むアーカイブズ—公文書管理法時代を迎えて—」と決定した。そして、具体的な研修、報告の内容について、公文書管理法に関わるもの、東日本大震災に関する内容を織り交ぜて扱うこととした。

復興支援コンサートと記念講演

復興支援ミニ・コンサート、福田元総理の記念講演については、当初の予定では公開事業として考えていた。全史料協の取り組みや資料保存の重要性について一般市民の方への普及が必要であり、地方オーケストラの草分けとして広く知られている群馬交響楽団の演

奏と元総理大臣の講演というコラボレーションにより、実現したいと考えた。

福田元総理の講演については、公文書管理法施行の年に、全史料協の全国大会で公文書管理について見解を述べてもらい、地方自治体の公文書管理、アーカイブズの場で努力されている方々の追い風にしたいと考えた。

群馬大会の成果と課題

いろいろなことを考えて企画を組んだため、結果として盛り沢山で駆け足の大会となってしまった感是否めないが、公文書管理法時代を迎えた現在、そして大規模災害を目の当たりにして我々は何を考えどう行動したら良いのか、地域社会の中で住民に親しまれ、必要とされるアーカイブズの在り方とはどんなものか、現在及び将来の住民に説明責任を果たすための公文書管理はどのようにすべきか、各研修会や報告を通して、様々な情報を共有するとともに問題点を再確認することができたのではないだろうか。今後、その個々の問題解決の取り組みを通して、公文書管理・アーカイブズの保存活用を通してより良い地域社会をどのように創造していくか、住民（利用者）、行政職員、アーカイブズ機関職員が密接に連携を図り、考えていくことが重要であろう。そのための働きかけを全史料協として担うことが求められているように思う。

自分自身、研修・報告を落ち着いて聴くことはできなかったが、群馬大会に多くのご参加をいただき交流させていただいたことはかけがえのない機会となった。また大会開催にあたり、講師・報告者各位、高崎市立中央図書館、大会・研修委員および委員会事務局（茨城県立歴史館）にひとかたならないお世話になった。文末に記して、感謝の意を表します。